

Artist In Residence Program 2011 Report In NASU

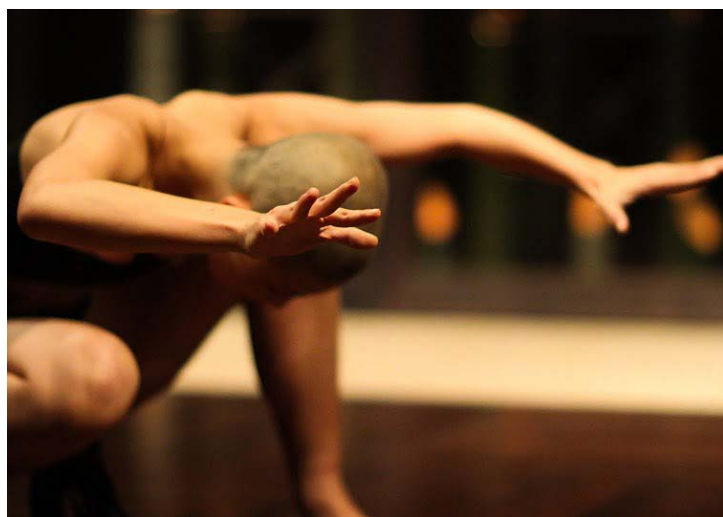
name 86B210
(鈴木富美恵 / 井口桂子)

genre 舞 踏

date 2011.7.9 ~ 9.3

profile

90年代より活動を開始し、97年の渡仏をきっかけに06～08年はヨーロッパを拠点に活動。2010年末にはオーストラリアでのヨガ・キャンプに参加し、東日本大震災後、東京青山のスパイラルにおいて震災復興チャリティーイベント「アートの力」でパフォーマンスを行う。劇場、クラブ、ストリート、ギャラリーなど場所を選ばない活動を国内外で続けている前衛舞踊デュオ。



▲滞在成果の作品

お疲れ様でした

二期倶楽部ホテルサービス 吉成太一

既に夏的那須の恒例イベントとなっている「山のシュレ」。
AIR プログラムに参加頂いた 86B210 のお二人に初めてお会いしたのは、丁度その1か月前の朝だったと記憶しています。
いつものように二期倶楽部本館の池の前の客室を通りかかると、しんとした霽のかかる空気の中、黙々とヨガをするお二人を見かけました。深い瞑想の中におられたのか、こちらには気付いていないようでしたが、美しくしなやかな太陽礼拝のポーズを拝見し、足を止めて魅入ってしまった事を覚えています。
その後、お二人と仲良くさせていただき、私も創作ダンスの世界を知る中で、この機会に是非とも那須の深い自然を体験し、制作に役立ててほしいと、いくつか那須の自然が豊かな場所にご一緒させて頂きました。

森が放つ、強烈な蝉の音。空が割れる雷音の超重低音。ミニマルでクリアな清流音。

1カ月間で体験されたそれらの音を背景に、あえて自然音のみのダンスを制作したお二人。那須の土地にて、前衛的で独創的なダンスを体験できたことを、心から嬉しく感じています。



▲滞在中のワークショップや創作活動等の様子

修了して

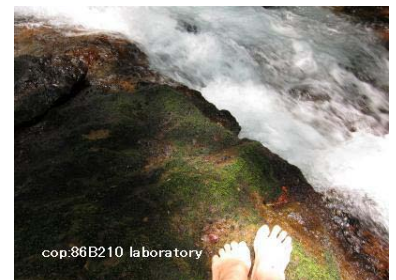
86B210 鈴木富美恵 / 井口桂子

那須高原の爽やかな自然に包まれての制作。滞在制作帰還、1ヶ月。いわゆる日常と自分を切り離し、自然に身体を預けての制作は、今迄気づかなかった感覚や、物事の見方を教えてくれるものでした。普段私達は、現代社会に生きる自分がふと感じる疑問や、孤独や、葛藤、そのようなものをテーマにして作品を作ってきました。今回も、兼ねてよりやってみたかった粘土(陶芸工房、ガラス工房もあり、制作環境は整っている)を用いて、チェコのクレイアニメの様な不条理な世界をダンスの世界でいかに表現出来るか、自在に顔が変わる粘土+身体で何が生まれるか、を実験しにいったのです。

震災後、よけいに自然の美しさや地域コミュニティの重要さ、その大きな力、また物事の本質とは何か、ということに直面する事が多くなり、人間力とは何か、地球の再精力の事等、滞在中にレクチャー等に参加出来た事もあり、人間の本来のパワーを取り戻す事。食生活も本当のものを食べる。五感を研ぎ澄ます。美しいものを見たり聞いたりする。という、まさにその環境のただ中で、また、森の中の連鎖、そのようなものから、全ては呼応すること、連鎖する事、なのだと感じ、そこから作品モチーフを組み立てていきました。その場所でなければ生まれなかった、モチーフでした。

物事の本質、それは、私達もダンスを媒体として模索していること、今回のAIR滞在中は、それを全ての角度から考えて構築する機会となりました。二期クラブの菜園でとれた野菜のあまりの美味しさに吃驚したり、国産米麴屋さんのちゃんとした味噌と醤油がどんなに素晴らしいか、など、食の面からも考えさせられました。全ては、本質とは何かにつぎののだと。改めて気づかされた日々でした。

1ヶ月と短い滞在制作でしたが、私達の中に杭の様に強く打ち込まれた、そんな貴重な体験でした。他の作家との交流、またそこから新たに映像プロジェクトが進行したり、これも呼応と、連鎖なのだと。これから素晴らしい連鎖が続く様、活動していこうと思います。



▲滞在中のワークショップや創作活動等の様子

AIR プログラム 86B210 を終えて

AIR ディレクター 富田勝彦

アート・ピオトープ那須で開催される AIR 公募プログラムに、舞踊（ユニット）「86B210、鈴木富美恵＋井口桂子」が参加した。今年からジャンルを広げた公募プログラム。これまでの2年間は、従来からあるガラス、陶芸工房の利用を踏まえてのものであったが、ジャンルを広げて募集することで、アート・ピオトープ那須の活用の幅を広げ、認知してもらうのが目的だった。

86B210 に初めて会ったのは、東京・六本木の高層マンションにある「カナダ・ケベック州の AIR 施設お披露目会」だった。ふたりは、ヨーロッパの AIR 滞在やフランス・パリのクラブやストリートでのパフォーマンス経験がある舞踊ユニットである。私は今プログラムまで、何度かそのパフォーマンスを拝見する機会に恵まれていた。直前に拝見したのは、東京・青山スパイラルホールでの“東日本震災被災地支援イベント”であった。公演後に「アーティストとして、被災地の方にできること、ボランティアでも何でもあればやります。」と話された言葉に、アーティストとしてのプライドと栃木県那須でのプログラムへの気概を感じ、楽しみにしていたのだ。

都会でのパフォーマンスが多い二人は、プログラム直前の2週間、オーストラリアでのヨガ・キャンプに参加した。感想を聞くと「身体の使い方が変わった」という。自然界の気の流れ、気配を意識するようになったそうだ。こんな話を聞いたので、プログラム開始時に、ヨガ達人・成瀬雅春の著書「空中浮揚」を差し入れた。

そんな二人が那須に来て、毎朝、二期倶楽部の庭内、林の中、芝生の上、七石舞台と自由に場を変えてヨガをしていた。そして、気分転換の那須散策や陶芸、ガラス工房での創作が、刺激にもなったであろう……。そんな場のエネルギーを身体に浸み込ませていった成果が、修了公演に表れていたと思う。自然と一体化し、そこから湧き上がるエネルギーを受け本能的ともいえるパフォーマンスに、二人の成長を感じた。自然と都会。都会に暮し、主に街中でパフォーマンスする二人にとって、自然の中で暮らした1カ月が、今後の活動にどのような変化をもたらすのか楽しみでならない……。



▲滞在中のワークショップや創作活動等の様子